

## 研究報告

# 地域に根ざした教育の課題と可能性

## － 道内の自主夜間中学を中心として －

加藤 隆\*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：地域連携、夜間中学、新渡戸稲造、自己尊重感

### 1. はじめに

戦後教育の方向性を示すものの一つに学習指導要領がある。最初の指導要領は、昭和22年に試案という形で当時の文部省から出されている。試案という性格であったことにも、これからの教育に対する教育行政の謙虚さを見て取ることができるが、その序論の中に記されている文言では、さらにそのことが明確になっている。例えば、以下のような記述が散見される。「これまでの教育では、その内容を中央できめると、それをどんなところでも、どんな児童にも一様にあてはめて行こうとした。だからどうしてもいわゆる画一的になって、教育の実際の場合での創意や工夫がなされる余地がなかった。このようなことは、教育の実際にいろいろな不合理をもたらし、教育の生気をそぐようなことになった。」<sup>1</sup>

このような現状認識と深い反省のもとに新しくスタートをした戦後教育だが、この70年あまりの流れを概観するとき、そのような教育的理想に近づくものだったかは疑問である。相変わらず、教育の内容を中央で決め、教師の目と意識も中央に向いている面はなかっただろうか。地域の実情を生かした教育という建前とは裏腹に、依然として画一的な内容に逃げ込んでいる面はなかっただろうか。そのような教育的歪みが、不登校児童生徒が慢性的に12万人台で推移し、高校の中退者が10万人台で推移<sup>2</sup>していることにも繋がっているように思われる。また、TIMSSなどの国際調査によっても、学校での学びに対する意欲のなさや、学校外で学習をする時間の少なさなど、日本の子ども達は非常に低い結果<sup>3</sup>になっていることにも表れている。

以上のように、教育的危機が指摘されている中で、本稿で取り上げる自主夜間中学は、今後の教育の在り方や地域に根ざした教育の可能性を広げるヒントを与えてくれるのではないかと考えた。北海道内に数ヶ所しかない自主中学であり、年齢の多様な老若男女が生徒として集い、学びを支える者も様々な経歴である。しかも、営利から一線を画して、運営はボランティアで営まれている。このように、学校教育の主流から見れば小さな一筋の流れである。しかし、戦後教育に関する様々な制度疲労を目の当たりにするにつけ、この自主夜間中学の理念と実践は、我々に教育の底流にあるものを呼び起こしてくれるように思えてならない。

### 2. 道内の自主夜間中学の誕生と経過

義務教育の未了者に対する教育の場として、公立夜間中学が8都府県に35校設置されている。それぞれに地域性が見られ、現在8校の公立夜間中学のある東京都の場合は、国際都市という性格からニューカマー外国人の生徒が多く見られる。反対に、11校と全国で一番多い設置数の大阪府の場合は、オモニという朝鮮半島から来た女性が最も多く、広島県では中国系の生徒が大半を占めている。いずれにしても、公立夜間中学を設置している都府県はすべてが東京以南で占められており、東北や北海道は皆無の状況になっている。

このことが大きな課題なのは、義務教育の未了者が見過ごすことのできない数字だからである。2000年度の国勢調査によると、義務教育未了者は15万9千人あまりである。この未了者とは学校機関に在学したことのない者、又は小学校を中退した者を指し、新制中学を中退した人は含まれていない。それを含めた人数に

\* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地

E-mail: katotaka@nayoro.ac.jp

については正確な数字は公表されていないが、2012年の衆議院文部科学委員会での審議では、戦後教育の中で学齢期に中学校に就学できなかった義務教育未了者を百数十万人としている<sup>4</sup>。井上は、北海道においても、国が把握しているだけで約1万人、実際には約10万人の義務教育未了者がいると指摘している<sup>5</sup>。このような実際上の義務教育未了者ばかりではなく、ひきこもりや不登校などによる形式的な卒業者、海外からの就労などによる未就学者を加えると、その数はさらに大きなものになっていると予測できる。

先述したように、北海道には公立夜間中学は開設されていない。このような地域を中心にして義務教育未了者の要望に応じて作られているのが自主夜間中学である。この種の夜間中学は全国に20ヶ所以上にのぼり、北海道では1990年に札幌、2008年には旭川、翌2009年からは函館と釧路につくられるに至っている。これら四つの夜間中学は、その母体として札幌遠友塾自主夜間中学から発展してきた経過があり、どの夜間中学でも入学者として以下の条件を共通的に掲げている。

- ①戦争や家庭の事情、病気などで小・中学校に行けなかった人
- ②形の上では小・中学校を卒業していても、生活上の不便を感じていて、基礎的な勉強をもう一度したい人
- ③現在、さまざまな理由で中学校に行っていない人

夜間中学を設置する地域の文化的社会的環境の特徴について先に触れたが、北海道に開設された四つの自主夜間中学も他府県とはかなり異なった面が見られる。その中から、札幌と旭川の自主夜間中学の誕生と経過をまとめながら、入学者の背景や、教育内容の特徴などを考察した。

表1 札幌及び旭川夜間中学の特徴、学習内容

名 称	開設年度	入学者の特徴・傾向など	主な学習内容・活動
札幌遠友塾 自主夜間中学	1990年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・募集人員 25名程度、入学試験なし、現在の在籍受講生（生徒）は約80名。設立以来の22年間で約400人の卒業生を輩出</li> <li>・受講生の大半は高齢者（70-80代の女性中心）</li> <li>・最近是不登校経験者、障害を抱える受講者も増えつつある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・週1日（水曜夜）の開講 午後6:00-8:40</li> <li>はじめの会：歌、連絡等</li> <li>授業1：6:20-7:10</li> <li>授業2：7:20-8:10</li> <li>HR、掃除：8:10-8:40</li> <li>・各学年（1-3学年）に分かれて一斉授業とじっくり学習（個別指導）の二本立て</li> <li>・授業科目（国語・日本語、数学、英語、社会）遠足、社会科見学</li> </ul>
旭川遠友塾 自主夜間中学	2008年4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・募集人員 20名程度、入学試験なし、現在の在籍受講生（生徒）は約70名</li> <li>・受講生は10代の中学生から80代までと幅広いが、大半は高齢者（70-80代の女性中心）</li> <li>・日本語学習を希望する外国人や不登校経験者が一定数在籍する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・週1日（土曜夜）開講 午後4:15-6:45</li> <li>はじめの会：連絡等</li> <li>授業1：4:45-5:30</li> <li>授業2：5:45-6:30</li> <li>おわりの会：6:35-6:45</li> <li>・各学年（1-3学年）に分かれて一斉授業とじっくり学習（個別指導）の二本立て</li> <li>・授業科目（国語・日本語、数学、英語、社会）その他に、遠足、生徒会活動も行なわれる</li> </ul>

表2 札幌・旭川夜間中学の科目時間数（中学1学年を例として 2012年度）

	総日数(時間数)	国語	数学	英語	社会	その他
札幌遠友塾 自主夜間中学	41日(82時間)	24時間	24時間	20時間	12時間	特別授業、理科特別授業など
旭川遠友塾 自主夜間中学	40日(80時間)	20時間	20時間	20時間	8時間	行事、面談、HRなど

このように札幌と旭川を比較すると、多少の違いはあってもほぼ同じような教育内容で取り組んでいることがわかる。また、高齢者が比較的多いということも配慮して、実際の中学校教育内容よりも弾力性をもって指導に当たっている。表1で示したように、各学年に分かれて一斉授業という形で行なう学びの場とともに、より細かく個人の学習ニーズに対応するために個別指導を中心とした「じっくり学習」を両者とも取り入れていることが大きな特徴である。

正規の中学校の場合、国語科の授業時数を例にとると、各学年140時間と学校教育法施行規則で定められている。それに比べるならば20時間前後というのは非常に少ないし、指導する側も相当の学習内容の吟味を行なっていることが伝わってくる。しかも、受講する生徒の年齢や背景の多様さ、入学動機や学習内容の既習状況の違いなどを考え合わせると、授業内容の計画は相当の吟味と検討を要していることが考えられる。札幌自主夜間中学の昨年度の国語科（1学年）の指導計画を見ると、年間到達目標として、①短い文章が相手に伝わるように気をつけながら書ける。②わからない言葉について自ら調べることができる。この2点を目標として掲げている。そして、1学期では国語辞典の引き方と活用を中心テーマとして国語力の向上を目指している。また、2学期では日常生活に必要な漢字の学びや、漢和辞典の引き方などを取り入れながら文章の構造を学ぶ内容となっている。最後の3学期では、文と文のつながり（主語、述語、修飾語、接続詞、句読点など）を実践的に学び、最終的には原稿用紙に短い文章を分かりやすく書くことを目標として取り組んでいる。このような学びを素地にして第二学年にという流れになっている。

いずれにしても、学齢期に様々な事情により学校教育での学びを逸した人々の切実な願いに応えようとして、自主的に学びの場を用意し、多くの指導スタッフを募り、財政面も含めた長期的な展望に立って運営を組織し、生徒一人ひとりの学びのニーズを把握した上で授業計画と学習展開を積み上げていく姿の中に、我々がこれまで見逃してきた教育的態度を見て取ることができるのではないだろうか。先ほどの指導要領の言葉で表現すると、「内容を中央できめると、それをどんなところでも、どんな児童にも一様にあてはめる」教育から、「学ぶものの必要を真摯に受け止めて、それを下から盛り上げて育てていく」教育への姿勢を見て取ることができるのではないだろうか。それはまた、地域の人々の必要に根ざした教育の在り方にも示唆を与えるものである。

## （1）北海道の自主夜間中学入学者の動機・背景

### 1）戦後の混乱や家庭の事情

前項で示したように、戦後教育の中で学齢期に中学校に就学できなかった義務教育未了者は百数十万人だというのは看過できない課題である。戦後教育もすでに70年近くを経過しており、おそらく義務教育未了者の背景や特徴についても、戦後のどの時系列で捉えるのかでかなり異なってくる。東京や大阪など本州の自主夜間中学では、外国人や在日韓国人などが多いことを指摘したが、北海道の入学者の傾向として特徴的なのは、その大部分を70代以上の高齢者が占めていることである。その中でも女性の割合が多いことがわかる。つまり、高齢者が圧倒的に多いという事実の中に、戦後の混乱が大きく作用していることが分かる。その方々の入学の動機としては、戦後の混乱の中で義務教育を受ける機会を失った者や、農業などの家庭の労働要員



として従事せざるを得ない中で学ぶ機会を失った者が少なくないことが分かる。以下に、札幌と旭川の入学者の動機を取り上げた新聞記事から各人の背景に触れてみたい。

・小学校を出てからずっと働いてきたよ。農業をしたり、建設現場で働いたり。中学ぐらいは出たかったなあ。札幌市内のOさん（72歳）は遠友塾に通って七年になる。十歳の時に終戦を迎えた。敗戦後の混乱期、中学に通う余裕はなかった。<sup>6</sup>

・札幌市内のYさん（64歳）は三年生。農業だった実家の手伝いに追われ、ほとんど学校に行けなかった。中学を出てすぐに缶詰工場に就職。病院や銀行の窓口で字が読めず困ることがあった。そんな時、遠友夜学校を知り入学した。<sup>7</sup>

・Iさん（60歳 札幌）は生後すぐポリオにかかり、両手足に障害がある。幼いころ、家は貧しかった。治療費もかさみ、学校に通えなかった。自宅の窓から同じ年ごろの子どもが登下校する姿が見えた。羨ましかった。Iさんは、「毎日、学校に通うのが夢。死ぬまでに一つでも多くのことを知りたいから。」と言う。<sup>8</sup>

・生徒の1人、Oさん（76歳）＝旭川市＝は樺太で終戦を迎え、14歳のとき生まれ故郷の旭川市に戻った。幼い弟3人と妹がいたが、父はシベリアに抑留されていた。帰国翌日から知人の店で皿洗いの仕事を始めた。樺太では尋常小学校に通っていたが、混乱が激しく、最後の1年はほとんど通えなかった。帰国して数年は教育委員会から声がかかったものの勉強したい気持ちはあったが通学はあきらめた。<sup>9</sup>

このように戦後の混乱の中で学ぶ機会を失ったり、北海道の厳しい労働環境の中で教育の機会よりも家庭の事情を優先した背景を見て取ることができる。そのような辛い厳しい過去を抱えている入学者は、反対に非常に強い学びへの欲求や、学校で学友と学ぶことへの憧れが強い動機となっている。このような背景を持った入学者が多いことが北海道の自主夜間中学入学者の大きな特徴である。それは、この後に設立される函館や釧路でも同じような事情であり、例えば、函館の設立に際しての新聞記事には入学者の言葉として次のような記事が掲載されている。「戦時中は勤労奉仕と援農ばかりで、英語はローマ字を学んだだけだった」「母が倒れ畑仕事をしなければならず、小学五年までしか学校に行けなかった。開校が楽しみです」<sup>10</sup>

## 2) 障害や不登校などの困難を持つ人の背景

受講者のかなりの部分は戦後の混乱などにより教育の機会を失った70代以上の高齢者が占めている。しかしながら、札幌においても旭川においても、障害を抱えることより学齢期にも学習の機会を逸してしまい夜間中学に通う者が一定数見られる。今日では、特別に支援が必要な子どもに対する理解や具体的な指導上の配慮や教育体制がかなり進んできたが、現在60代以上の年齢の人たちが学童期に障害を抱えたまま学校に通うということは、相当の困難があったと予測される。障害者に対する社会的な偏見がまだ相当残っていたであろうし、学校の支援体制としても、そのような子ども達への理解が不十分であり、前述したポリオの障害のあったIさんのように、自宅の窓から同じ年ごろの子どもが登下校する姿を羨ましく眺めていたというケースも多かったのではないだろうか。

また、今日的な教育問題である不登校経験者が見られるということである。現在では、そのような経験者の受け皿としてフリースクールや若者自立支援事業など様々な事業活動が展開されているが、それでも自主夜間中学を選ぶ人たちがいるということである。このことに関して、面談調査を行った旭川の教師スタッフは、不登校経験者が自分と同年齢の集団の中で活動することへの抵抗感が根底にあること、自主夜間中学のように年齢的にも様々で、高齢者も多い中で過ごすことの有用性を指摘していた。また、井上も論文の中で、不登校経験者の大きな特徴として、「同世代との交流に対してトラウマを抱えていること、一方で何とか社会に出るきっかけをつかみたいという思いが強いこと」を挙げている。<sup>11</sup>

以上のような意味から、「じっくりコース」という命名に端的に表れているように、自分の学習進度に応じ

た学びを保障していることは、障害や不登校などの困難を持つ受講生には望ましい教育的な配慮である。また、学習理解が十分ではなくても、ところてん式に卒業させてしまう傾向の強い通常の中学校と比べると、在籍年限は三年間と限定されてはおらず、必要に応じてその学年に留まったり（札幌）、三年間の終了後にも聴講生として自由に在籍して学ぶことができる（旭川）環境であることも大きな励みと教育的なメリットといえる。留年制度も含めて、このような自主夜間中学の教育的な取り組みは、欧米を中心に小中学校でも見られることであるが、留年制度を一つ例にしても、日本の場合はそのことがまた偏見やいじめの原因となるきらいがある。この辺の教育文化の意識変革や、健全な意味での個人主義が育つことが、今後の教育の質の向上には大きな要因ではないかと思えてならない。

## （２）遠友夜学校の誕生と変遷

ところで、この自主夜間中学の源泉は、明治期のキリスト教教育家である新渡戸稲造に遡ることができる。新渡戸はドイツ留学からの帰国後、1891（明治24）年に札幌農学校教授に就任している。それ同時に、札幌に設立された私立北鳴中学校の教頭も兼務し、2つの学校で教鞭を執っていた。その一方で、当時の札幌の子ども達の就学状況は厳しいものがあり、小学校に通えるのはせいぜい半分程度だった。当時の日本の就学率の統計によると、小学校就学率は、1873（明治6）年で28%（男40%、女15%）であり、新渡戸の就任当時の1891年でも全体の就学率が50%を超えたほどである。特に、女子の就学率の低さが顕著であり、そのような背景もあって、1893（明治26）年には、低い女子就学率に対し「女子教育ニ関スル件」（文部省訓令第8号）が出されるまでに至っている。

以上のような社会的状況の中で、公立小学校に通えない子どもや、働いている青少年達のための夜間学校の必要性を新渡戸は感じ、万里子夫人の実家・エルキントン家からの資金的援助を受けて、1894（明治27）年1月に札幌区南4条東4丁目の地に北海道初の夜間学校・札幌遠友夜学校を設立している。つまり、今日の自主夜間中学の源泉は、新渡戸が立ち上げた120年前の札幌遠友夜学校に始まるのである。

開校当時は、毎週1回1時間開講し、生徒の希望する科目を教えるというスタイルだったのだが、すぐに毎日1時間、尋常小学校での教育科目を教えるという形に変わっている。そして1897（明治30）年、文部省小学校令施行規則施行により毎夜2時間の授業形態に移っている。さらに大正に入って本科・予科に分かれ、1921（大正10）年4月に中等部が設置され、旧制中学校の授業も行われるようになった。授業科目は基本的に尋常小学校で教える科目（国語、算数、修身、社会、理科、体育）だったが、月に2回修身講話という活動も行なっていたようである。

この札幌遠友夜学校の教育理念については、三島もその論文の中で取り上げているが<sup>12</sup>、その特徴的なことは「すべての人に慈愛を持って」ということだろう。この言葉はアメリカ第16代大統領エイブラハム・リンカーンの言葉で、新渡戸がアメリカ留学時代に感銘を受けたものである。そして、二つめの教育理念として「学問より実行」を重要なこととして挙げている。知識だけの頭でっかちではなく、実際に行動することを重視する姿勢である。つまり、物事を行うには他人への思いやりをもって実行できる人間の育成を目的としていたことが分かる。また校名の「遠友」は、論語の「友あり、遠方より来る。また楽しからずや」という一節から命名されたものである。

ところで、札幌遠友夜学校の学校運営はボランティアであり、教師をしている中から代表を選出する組織となって運営されていた。経済的にも生活の厳しい子弟が多かったこともあり、この学校の授業料は無料とし、運営資金面については後援組織「遠友会」による寄付や、内務省と道庁からの助成金で賄っていた。ちなみに、ボランティアに当たっていた教師の多くは、当時の北海道帝国大学の学生、さらに北大OBであり、全員が無給で教育活動に携わっていた。このような遠友夜学校の教育姿勢の中に、新渡戸の「教育理念である「すべての人に慈愛を持って社会奉仕を行なう」や「学問より実行」という精神を見取することができる

し、この精神がその後も連綿として受け継がれていったといえるだろう。

1921（大正10）年に中等部が設置された遠友夜学校は、その後も校舎改築などが行われて発展を続けていた。しかし、その後は新渡戸本人や夫人の相次ぐ死去や、太平洋戦争など社会環境の変化、或いは、札幌でもこの頃になると学校教育がかなり充実してきたこともあり、1944（昭和19）年3月に閉校に至っている。その後も財団は運営を続けていたが、1964（昭和39）年3月に正式に解散している。実に、1894（明治27）年から70年間にわたって夜学校は灯をともし続けてきたのである。

このような教育的遺産の経過の中で、1990（平成2）年4月に札幌遠友塾自主夜間中学が設立され、毎週水曜日に国語、算数、英語、社会4教科の授業を行っている。遠友夜学校の精神は、今も札幌の地で脈々と受け継がれている。設立に携わった初代の札幌遠友塾代表の工藤慶一は、その設立趣意書の中で、次のように記している。

「1987年の北海道新聞に“遠友塾読書会”の記事が掲載されました。“遠友塾読書会”は、故牧野金太郎先生が主催し、自主夜間中学の設立を目ざしていました。この動きは、私が捜し求めてきた道だと直感しました。北海道では10万人を超える実質的に義務教育を終えていない人たちが、切実に学びの場を求めており、日本国憲法第26条にある“教育を受ける権利”を实在のものとしたいという願いが湧き上がりました。入学希望の電話が鳴り止まぬほど、学びを求めている人たちがたくさんいることが分かりました。とうとう100人を越えたところで募集を打ち切り、残りの人は翌年まで待ってもらう状態でした。」

このような工藤の回顧の中に、札幌遠友夜学校が設立された明治期の小学校就学率50%という社会的状況とは違った意味で、今日でも教育的弱者がかなりの規模で存在し、その一人ひとりが自己実現の機会を切実に待っていることを読み取ることができる。

### 3. 自主夜間中学が問いかけているもの

本章においては、これまで取り上げてきた自主夜間中学の設立と実践が、我々に提起していることは何かという側面から考察したい。以下に、二つの視点からまとめたい。

#### （1）これまでの教育の姿勢を再考するという視点

日本が高度経済成長期に入り、経済的繁栄を謳歌していた時期の1971年に、全国教育研究所連盟は示唆的な調査を行っている。「義務教育に関する意見調査」において、小学校教諭の65.4%、中学校教諭の80.4%がクラスの半数以上の子どもが授業の内容を理解できていないと感じているという結果であった<sup>13</sup>。学習内容の増加、高度化は、授業の進度が早すぎて一部の子どもしかついていけない子どもを増大させ、教師が落ちこぼさざるを得ない状況を作るに至ったといえる。教育が真の意味で子どもの育ちを保障するものという理念よりも、経済社会の要望に学校教育面から応えるという側面を強化してきた結果と見ることもできる。そのため、その後の状況はさらに深刻化し、学校の授業が理解できている子どもは小学校で7割、中学校で5割、高校に至っては3割程度しかいないという、いわゆる「七五三教育」という言葉まで生まれ、半ば構造的に落ちこぼさざるを得ない状況が続いてきた。

このことは、別の側面からも共通項を見い出すことができる。下記の図1は、内閣府が自己肯定感について平成12年と平成19年に行なった比較調査である。それぞれ、対象は9～14歳の男女約2000人である。

この調査の中の「自分に自信がある」という質問に対して、「あてはまらない」と回答した者の割合、つまり「自分に自信がない」と回答した者は、平成12年には11.9%であるのに対し、平成19年には21.3%に倍増している。また、小・中に分けて見てみると、小学生では9.4%から17.6%に、中学生では14.1%が25.1%にそれぞれ増加し、それに「あまりあてはまらない」（自信のない傾向である）を加えると、小学生の5割、中学生の7割が自分を否定的に捉えていることが伺える。他の調査でも同様の結果となっている。



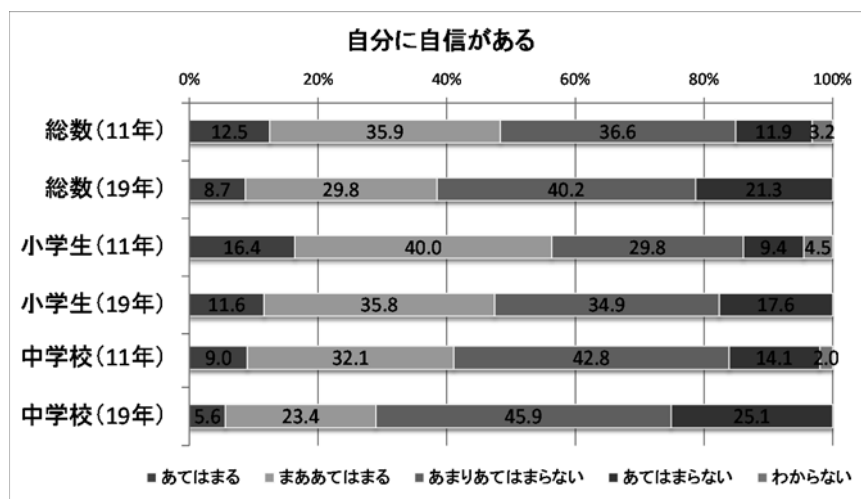


図 1. 内閣府 低年齢少年の価値観等に関する調査

平成 12 年：

9～14 歳 男女 2243 人

平成 19 年：

9～14 歳 男女 2143 人

興味深いことであるが、自主夜間中学に学びに来る者の中に、高校などの既卒者の希望が多くなっている。中学や高校時代には十分に理解できなかった学習への満たされない思いや後ろめたさが受講者を夜間中学へといざなっているのかもしれない。おそらく、このような思いを抱いている人々は潜在的に非常に多いのではないだろうか。先に指摘したように、クラスの半数以上の子どもが授業の内容を理解できていないと感じ、それが恒常的に続いているような学習環境とは何かと問わざるを得ない。この種の実質を伴わない「箱ものの教育」を連綿と続けてきたという面がなかっただろうか。そこには、市場経済の論理に則って、より合理的効率的に、より功利的経済的に、よりスピーディーに組織立って学校教育を捉え、経済社会に貢献する一員に相応しい資質を備えた人材を供給するという姿勢が顕著だったのではないだろうか。このような学びの過程の中で、大多数が自尊心や自分への肯定感を失っていく子ども達が増加することは火を見るよりも明らかである。

自主夜間中学の取り組みが我々に指し示している本質は、社会の澁のような状況に遭遇し、そのような中で義務教育を満足以経験できなかった一人ひとりではあったが、そのような過去を背負っていてもなお個々の内に秘められている成長への強い欲求に応え、自己実現を果たしたいという人間の尊厳を受け止める場を提供したことではないだろうか。社会全体が経済合理性で論じられ、その論理が学校教育にも家庭教育にも浸透し、誰もがステレオタイプの人間評価しかできない状況に陥って機能不全になっている中で、その評価基準とはまったく別の価値基準を提起しているように思えてならないのである。それをひと言で表現するならば、人間への尊厳に向き合うということではなないだろうか。

筆者は二度ほどフィンランドに教育視察と調査研究に行ったことがあるが、その学習環境の充実や教育行政の充実という根底に、人間への尊厳という理念が息づいているのを強く感じた。北海道と同程度の人口しかないこともあり、どんな人間（優秀かどうか、障害があるかないかということを超えて）にも豊かに充実して生きゆく尊厳があるという哲学を社会全体が共有していると強く印象づけられた。学校でも、医療施設でも、老人施設でも、支援するスタッフの方々から「人間の尊厳」という言葉を何度も聞いた経験をもっている。

これまでの戦後の教育改革の変遷を見ていると、結局のところ教育制度や法律をどう変えるか、教育予算をどのように手当てするのかに主眼が集まり、人間の尊厳という理念や哲学まで立ち至っての議論は少なかったのではないだろうか。自主夜間中学の取り組みには、教える立場の教師と学ぶ側の生徒という関係を超えた、人間としての出会いの喜びや、学ぶ者の根底にあるものを受け止める精神、まさに、人間の尊厳が再生する可能性を見るのである。

## (2) 居場所の充実を図っているという視点

面談調査をしたときに教育スタッフが指摘していたことだが、高齢者は老人ホームの茶のみ友達では満足していないとのことであった。そのような停滞感のある環境ではなく、もっと自分を高めるような学びを求めているという。それは、学びの充実という面とともに、学ぶ者同士の人間関係の充実や、自分の生きがいの創造という欲求も強いと指摘した。このような現実を見ると、日本がこれまで掲げてきた生涯学習社会の捉え方も再吟味する必要に迫られているように思えてならない。このことに関して、旭川自主夜間中学の代表の古野弘明代表は、次のように述べている。

「生涯学習という言葉が流行をはじめて既に四半世紀の長い時間が経ちますが、中学校卒業者のこういう潜在的な生涯学習ニーズにも眼が向けられてよいのではないかと思います。私達は、義務教育未修了者の学習ニーズを掘り起こすことを最も大事なことのひとつとして出発しました。(中略) これまで、生涯学習という言葉は、義務教育程度の内容を学び直すという意味合いでは使われてきませんでした。だから、生涯学習時代の鬼子ともいべき私達の存在をどう的確に表現し、右のような学習ニーズを持つ人々にどう発信すべきか、いろいろと考えさせられた秋でもあったのです。」<sup>14</sup>

確かに、これまでの生涯学習という響きには、高校や大学などの学校機関を修了したあとも、一生学ぶことが望ましいという、将来にベクトルが向かっている面が強かった。しかし、義務教育を終えていない者や、不本意な学びであったので、もう一度学び直したいという過去の自分に向き合うための生涯学習という側面は足りなかったように思う。しかも、多くの場合、この生涯学習の内容が趣味の領域を出ない状況もあり、本当の意味で生涯学習を充実することが求められている。また、そのような活動が深まることで、学びの充実や学ぶ者同士の人間関係の充実、或いは、自分の生きがいの創造という、いわば、居場所づくりの充実につながるのではないだろうか。

さらに付け加えると、先に井上の指摘を取り上げたように、同世代との交流に対してトラウマを抱えている不登校経験者にとって、自主夜間中学のように年齢的にも様々で、高齢者も多い中で過ごすことの教育的な効果は大きいのではないだろうか。そのような意味で、彼らにとっては異年齢の人々が混在する環境は、望ましい居場所になる可能性を秘めている。今日、幼児教育施設と同じ敷地内に老人福祉施設を隣接させ、相互の人間的な交流を図る動きが顕著になっている。これまでの学校教育は、単に年齢の区切りを能力の区切りと捉えて営まれてきたが、様々な異年齢学習や、自主夜間中学のように高齢者までも範囲に入れた学びの場がもたらす教育的意義について検討する必要があるのではないだろうか。

## 4. おわりに

本稿では、論文タイトルを「地域に根ざした教育の課題と可能性」とした。この「地域に根ざした」という言葉の中に、筆者は二つの意味を込めて論じてきた。一つは、単なる飾り言葉ではなく、本当の意味で地域のニーズに根ざした教育の姿とはどんなものかという意味である。札幌自主夜間中学の工藤代表が、「この動きは、私が探し求めてきた道だと直感しました。北海道では10万人を超える実質的に義務教育を終えていない人たちが、切実に学びの場を求めており、日本国憲法第26条にある“教育を受ける権利”を实在のものとしたいという願いが湧き上がりました。」と直感したとき、そこには本当に意味で地域のニーズに根ざした教育の姿が立ち現れている。また、旭川の古野代表が「四年半の試行錯誤の経験を通して、私達に共通に直観されたのは、私達の住む地域社会には、現在の義務教育の、中学校程度の学習内容をもう一度学び直したいと願っている人々が想定以上に多くいるのではないかと、ということだったのではないのでしょうか。」と直感したとき、そこには本当に意味で地域のニーズに根ざした教育の姿が見て取れるのである。

「地域に根ざした」の二つめの意味は、人間に根ざした教育の姿とはどんなものかということだった。そのことについては、経済合理性の価値基準で人もモノも評価される風潮の著しい現代社会にあって、自主夜間



中学の取り組みの中に、それとは違った価値基準を見い出したいと考えたことである。それを、人間の尊厳という言葉で表現したが、このことについては捉え方が不十分な面もあり、今後の考察の中で深めていきたい。

本稿をまとめるにあたって、旭川自主夜間中学のスタッフの方々には多くの示唆を戴いた。感謝とともに、今後も継続的な調査を行い、それぞれの地域に息づいた教育の在り方について、さらに研究を行なっていきたい。

※本研究は、ポルト研究助成を受けて行ったものである。

#### 【註】

- <sup>1</sup> 文部省 学習指導要領一般編（試案）総則 1947
- <sup>2</sup> 過去20年間は中退者は10-11万人で推移してきたが、経済状況の悪化などを受けて、平成18年から減少傾向に転じている。
- <sup>3</sup> T I M S S 調査 学習意欲の低下の項目：勉強（数学）が楽しいと思う生徒の割合 数学39%（48カ国中43位）国際平均67%などに表れている。
- <sup>4</sup> 衆議院文部科学委員会 2012.8.24
- <sup>5</sup> 井上大樹 あらゆる「貧困に立ち向かう札幌遠友塾」 勤医協札幌看護専門学校紀要 p 36 2008年度
- <sup>6</sup> 「学びたい 公立夜間中学を求めて 上」北海道新聞 2007.12.20
- <sup>7</sup> 同上
- <sup>8</sup> 「学びたい 公立夜間中学を求めて 中」北海道新聞 2007.12.21
- <sup>9</sup> 北海道新聞 2009.4.1版
- <sup>10</sup> 北海道新聞 2009.4.10版
- <sup>11</sup> 前掲書 p 39
- <sup>12</sup> 三島徳三「新渡戸稲造と遠友夜学校：現代の教育課題とのかかわり」『基督教學』45号 に詳しい
- <sup>13</sup> 義務教育改善に関する意見調査報告書 全国教育研究所連盟 1971.2 対象教師8000人の調査
- <sup>14</sup> 2012年度文集「友あり とともに学ぶ」 自主夜間中学旭川遠友塾

#### 【参考文献】

- 松崎運之助 『夜間中学 その歴史と現在』 白石書店 1979年
- 山本 実 『夜間中学』 明治図書出版 1970年
- 井上大樹 「あらゆる貧困に立ち向かう札幌遠友塾 ―夜間中学運動の現代的意義―」  
勤医協札幌看護専門学校紀要 2008年
- 添田 史 「自主夜間中学の活動と展望」 ボランティア学研究Vol. 8 2007年
- 佐藤全弘 『現代に生きる新渡戸稲造』 教文館 1988年

